

東日本大震災復興関連 埋蔵文化財調査報告書 I

—下野郷館跡第 2 地点—

2013 年 3 月

岩沼市教育委員会

東日本大震災復興関連 埋蔵文化財調査報告書 I

—下野郷館跡第2地点—

例 言

1. 本書は宮城県岩沼市下野郷字館内地内に所在する「下野郷館跡」発掘調査報告書である。
 2. 本発掘調査は、東日本大震災で被災した個人住宅建築工事に伴う事前の記録保存を目的として実施されたものである。
 3. 発掘調査は、岩沼市が2011（平成23）年10月19日から10月26日にかけて実施し、岩沼市教育委員会生涯学習課が調査を担当した。調査対象面積は21m²である。
 4. 出土品整理及び報告書作成については、2012年11月1日から2013年2月28日まで、岩沼市文化財整理室にて行なった。
 5. 本書の遺構番号は、遺構の種別に関わらず、現地調査時に付したものを使用した。遺構記号は以下の通りである。

SE; 井戸跡 SD; 溝跡 SK; 土坑 SX; 不明土坑 P; 小柱穴

6. 本書の執筆・編集は、生涯学習課内での協議の上、川又隆央・熊谷篤が担当した。
 7. 発掘調査及び資料整理に際し、地権者・各関係機関よりご理解とご協力を賜った。感謝申し上げます。
 8. 本報告書における遺構・遺物挿図等の指示は次の通りである。
 - (1) 遺構実測図の水系高は海拔を示す。
 - (2) 縮尺は図に示すとおりである。
 - (3) 遺物観察表の法量における単位は「cm」である。
 - (4) 土層及び土器の色調は「新版標準土色帖」(小川・竹原:1973) に掲った。
 9. 今回の発掘調査では測量原点として平面直角座標である岩沼市公共基準点を用いでいるが、東日本大震災後の使用であるために将来的には若干の齟齬が生じる可能性がある。

目 次

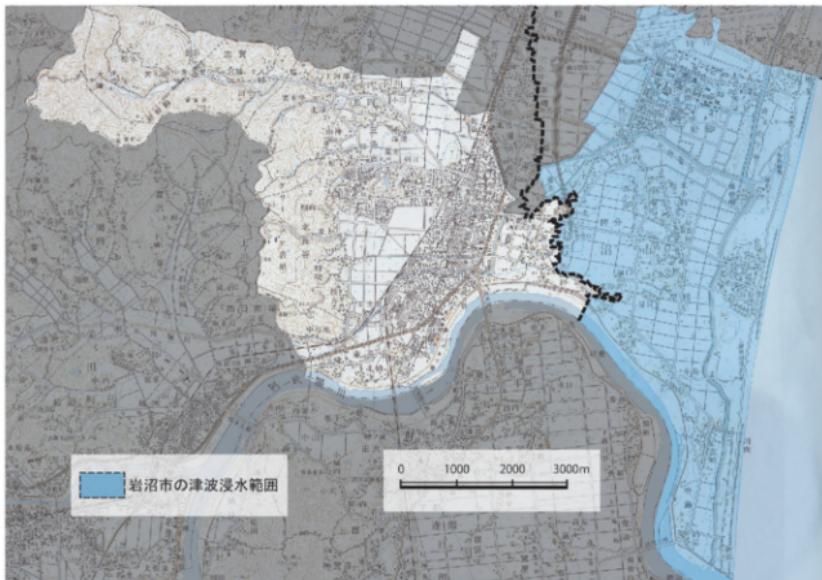
第Ⅰ章 岩沼市における東日本大震災被害概要	1
第Ⅱ章 下野郷館跡第2地点	
1. 遺跡の概観	2
2. 調査に至る経緯と経過	7
3. 発見された遺構と遺物	9
4. まとめ	14

第Ⅰ章 東日本大震災における岩沼市の被害状況

2011年3月11午後2時46分に発生した「東北地方太平洋沖地震」と名付けられた巨大地震では、岩沼市においても最大震度6弱を計測した。さらに余震が続く中、大津波が午後4時前後に沿岸部へ達し、その後何度も押し寄せたことによって市域東部の玉浦地区では183名にのぼる尊い人命が失われた（ほか行方不明1名）。また多数の人が流失あるいは浸水し、海岸に向かって広がる農地1240haが冠水した。この津波は仙台平野以南の地では海岸線の奥深くまで浸水域が広まつたことが知られているが、岩沼市においては海岸線より平野部で最大約4.3kmまで津波が達し、総浸水面積は29km²、実に市域の約49%に相当するという甚大な被害となった。

また津波が及ばなかった市街地においても電気や上下水道などのライフラインは全て寸断され、市民生活に重大な支障をもたらしたが、建造物に与えた影響は特に大きく、津波による被害と合わせると全壊723棟、半壊1582棟、一部損壊2601棟にのほり、仮設住宅への入戸は384戸となっている。中でも岩沼市は江戸時代に奥州街道（奥州道中）の宿場町として栄えており、震災以前は商家の土蔵などが点在するなどその名残をとどめていたが、今回の震災によってその大部分が姿を消すことになってしまった。

岩沼市では震災発生以降、被災者支援に当たるとともに、他市町に先駆けて復興に向けての準備に着手し、2012年9月には復興計画であるマスタープランを策定し、現在は市域東部の玉浦地区において防災集団移転事業に関わる造成工事を加速度的に進めている。



第1図 岩沼市の津波浸水範囲図

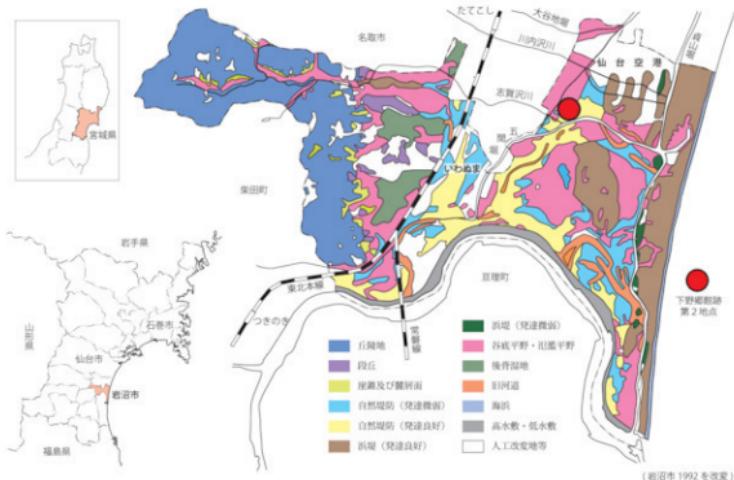
第II章 下野郷館跡第2地点

1. 遺跡の概観

a. 位置と地理的環境（第2図）

岩沼市は宮城県の南東部に位置し、東は太平洋を臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亘理町と、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で村田町・柴田町と市域を接する。市域の南端を東流する阿武隈川は福島県と栃木県の境に位置する旭岳に端を発し、福島県内を北流して宮城県へと至る大河川であり、その全長は国内6位の239km、流域面積は5400km²を測る。当市は、この阿武隈川が太平洋に注ぐ河口部北岸に位置している。また、当市は古来より浜街道と、東街道が合する地点であるが、現在でも国道4号と同6号、JR東北本線と同常磐線の合流地点となっており、交通要衝の地として知られている。

市域を地質学的に大別すると、西側の山地と東側の広大な沖積地に分けられる。山地は南北に延びる高館丘陵（標高200～300m）・岩沼丘陵（標高10～100m）と、これから東へ舌状に張り出す標高10～30mほどの小規模な段丘面から成る。山地の東側に展開する広大な沖積地は名取平野と通称され、岩沼丘陵の東縁から太平洋までの間に7～8kmの幅をもって発達する。この名取平野は阿武隈川をはじめとし、五間堀川・志賀沢川などの中小河川の堆積作用によって形成され、その沿岸には自然堤防が顕著に発達している。本遺跡地は、五間堀川左岸に形成された自然堤防上に占地している。現地表面の海拔は2.1m前後を測る。



第2図 岩沼市の位置と地形分類

b. 周辺の遺跡と歴史的環境（第3図）

岩沼市では、現在66箇所の遺跡が確認されている。以下、市の考古学的様相について概略を記す。

縄文時代の遺跡は、市域西側の丘陵部に広く点在し、特に志賀沢川流域の丘陵裾部にまとまった分布を確認できる。発掘調査によって得られた知見はまだ多くないが、鶴ヶ崎城跡【23】では鶴ヶ島式や梨木畠式に比定される早期後葉の土器群が発見されている（岩沼市教委2005）。

弥生時代の遺跡は9箇所で確認されているが、具体的な様相については明らかでない。遺跡の分布状況を見ると、その多くが縄文時代の立地を踏襲する形で丘陵部に展開する一方、かめ塚西遺跡【14】のように標高の低い平野部に立地する遺跡も見られるようになる。朝日古墳群【21】では、昭和15年の調査時に、中期後葉の時期を中心とした多量の土器片が出土し（岩沼市教委2007）、北原遺跡でも中期から後期に比定される土器片が出土している（宮城県教委1993）。

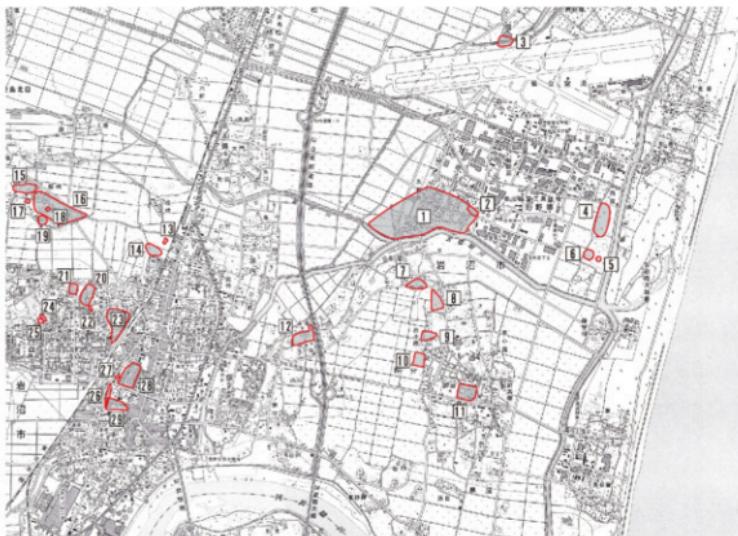
古墳時代の遺跡は31箇所で確認されており、北原遺跡では塩釜式期に比定される堅穴住居跡が36軒検出されている。このうち、10号住居跡からは39個の土玉が出土し、前代から続く稻作のほかに、生業として魚撈も行なっていたことが明らかとなった（宮城県教委1993）。

高塚古墳は、県指定史跡のかめ塚古墳【13】をはじめ、長岡地区の丘陵上に築かれた長塚古墳【17】、新明塚古墳【18】などが知られている。長塚古墳は、昭和26年（1951）に国学院大学の樋口清之教授らによって発掘調査が行われ、埴丘内部の墓室から人骨が発見されたという（岩沼市1984）。一方、横穴墓群は岩沼丘陵から東西に派生する低位丘陵斜面の泥岩層露頭面で多く造営され、現在までのところ9箇所で確認されている（消滅した横穴墓群を含む）。二木横穴墓群【26】では頭椎太刀の柄頭の一部が（鍛治・佐藤ほか1962）、長谷寺横穴墓群では全国的に稀少な子持ち平瓶が出土し（小野・志間1968）、さらに引込横穴墓群では轡の一部が出土（岩沼市教委2000）するなど、各遺跡で貴重な調査成果が得られている。

古代の様相については不明な点が多いが、『延喜式』に記載され、多賀城跡出土の過所本簡（多賀城跡調査研究所1985）でもその名が知られる「玉前刻」は、本市南部の玉崎地区に存在が比定されている。玉崎地区の東側に展開する原遺跡では古代の遺構・遺物が確認されており、駿家関連施設が営まれていた可能性がある。

中・近世の遺構と遺物は鶴ヶ崎城跡、下野郷館跡【1】、朝日古墳群、長徳寺前遺跡【19】、丸山遺跡【28】、竹駒神社境内遺跡【29】、中ノ原遺跡、西須賀原遺跡で確認されている。

鶴ヶ崎城跡の第1地点では、東北福祉大学によって平成24年まで12次に亘る調査が実施され、石列や溝跡、地鎮関連の遺構などが見つかっている（東北福祉大学2011）。また第4地点の調査では15世紀前半頃の青磁盤や常滑焼甕片などが出土し、さらに中世から近世の時期にかけて補・改修されたと推定される土累が確認された（岩沼市教委2005）。このほか、丸山遺跡では文献などの記録類では見られない中世末段階の区画溝を確認し、近世の岩沼要害を描いた各種古絵図にみられる「下中屋敷」を区画した溝跡なども検出している（岩沼市教委2010）。竹駒神社境内遺跡では、向唐門地点の調査で、伊達吉村によって行われた宝永7年（1710）の本殿改修に伴う大規模な整地層を確認した（岩沼市教委2009）。



第3図 岩沼市内遺跡分布図

No.	遺跡名	所在地	立地	種類	時代
1	下野瀬跡	下野瀬字前内・船舟	浜堤	城跡	古代・中世・近世
2	野外遺跡	下野瀬字野外	浜堤	散布地	古代
3	浜芦鬼谷跡	下野瀬字小谷地	台原堤防	散布地	古墳時代
4	真大瀬遺跡	下野瀬字真大瀬	浜堤	散布地	古墳・古代
5	仁古原古墳	下野瀬字奥入川	浜堤	円墳	古墳
6	仁古原西廻跡	下野瀬字奥入川	浜堤	散布地	古代・古代
7	前堀遺跡	下野瀬字前堀	浜堤	散布地	古代・近世
8	西土手遺跡	押分字西土手	浜堤	散布地	中世・近世
9	前前遺跡	押分字前前	浜堤	散布地	古代・近世
10	新筒下遺跡	押分字新筒下	浜堤	散布地	古代・近世
11	新田走遺跡	押分字新田走	浜堤	散布地	古代・近世
12	上中筋遺跡	下野瀬字上中筋	自然堤防	散布地	古代・中世・近世
13	分の深古墳	宇都塚	浜堤	前方後円墳	古墳時代
14	分の深西廻跡	宇都塚	浜堤	散布地	古代・古墳
15	豊塚北遺跡	豊塚字上和田	丘陵	散布地	古墳・奈良・平安

No.	遺跡名	所在地	立地	種類	時代
16	上佐崎遺跡	長岡字上佐崎	丘陵	散布地	绳文・古墳時代
17	長塚遺跡	長岡字白	丘陵斜面	円墳	古墳時代
18	新明字古墳	長岡字新明	丘陵斜面	前方後円墳	古墳時代
19	新堤前遺跡	長岡字新堤	平地	精錐	中世・近世
20	朝日遺跡	朝日一丁目	丘陵	散布地	古墳・古代
21	朝日古墳群	朝日二丁目	丘陵	散布地・円墳	古墳・中世
22	上ヶ崎側穴墓群	上ヶ崎二丁目	丘陵斜面	側穴墓群	古墳時代
23	前ヶ崎城跡	宝町一丁目	丘陵	城跡	绳文・中・中期・近世
24	白山古墳	字白山	丘陵	前方後円墳	古墳
25	白山側穴墓群	上白山四丁目河内	丘陵斜面	側穴墓群	古墳時代
26	二木側穴墓群	二木二丁目	自然斜面	側穴墓群	古墳時代
27	丸山側穴墓群	二木二丁目	自然斜面	側穴墓群	古墳時代
28	丸山遺跡	二木	自然斜面	集落跡	中世・近世
29	若狭井社始輪遺跡	福岡町	自然斜面	社寺	近世

c. 下野郷館跡第1・第3地点の成果概要（第4図）

今回の調査地点の周辺では、これまで第1地点、第3地点で発掘調査が行われている。以下にこの2地点の調査によって得られた成果の概略を記す。

【下野郷館跡第1地点】

第1地点は県道直理塙釜線の改良工事に伴い、平成12～15年まで4次にわたる調査が行われている。検出遺構は掘立柱建物跡61棟、塀・柱列跡2条、井戸跡58基、溝跡53条、土坑31基などであり、主に五間堀川に近い調査区南半部に集中して分布していた。出土遺物の年代観から古代、中世、近世にかけて土地利用が断続的になされていたと考えられるが、主体となる時期は近世段階である。掘立柱建物跡の多くは重複関係にあるが、これは屋敷地内での建物建築範囲が概ね定まっていたことを示している。なお、主軸方位などから3～4期にわたる画期が想定されるが、柱穴内よりの出土遺物量は僅少であることから明確な変遷は提示できていない。井戸跡は掘立柱建物に近接して分布していることから、掘立柱建物跡と同様に屋敷地内での空間利用にある種の規定が存在していたと考えられている。大多数が素掘りであり、中でも上部が漏斗状を呈するものが最も多い。また木製の井戸枠を有する井戸跡も3基存在しているが、隅柱として杭を用いて横桟を渡し、外側に蓋あるいは半載した竹を密に立て並べるという構造を呈している。また井戸底面までの調査は湧水量が激しいことから崩落の危険性を鑑みて大半は未実施であったが、SE03の底面からは曲物を水溜として使用している事例が確認されている。溝跡は調査区全域で確認されているが、これらは規模や走方向から区画溝、取水・排水溝などの機能を考えられている。このうち区画溝では、SD10・407は建物の周囲にL字状に巡ることから屋敷地内の区画を目的に掘られた可能性が考えられる。これに対し調査区西側で直線的に南北方向に延びるSD60・506は、これより西側が湿地状の土層堆積であり建物等が存在しないこと、底面が緩やかに五間堀川へ向かって傾斜していることから大局的にはこの地区的居住区域の境界を示し、併せて排水を目的に掘られたものと考えられている。なお南側の一部を開口するSD31は極めて小規模な区画であることから、内部に屋敷神などを配していた可能性が考慮されている。土坑も調査区のほぼ全域で確認されているが、特筆されるのはSK401である。この土坑は略長方形を呈しており、内部からは白石市周辺で生産された中世陶器壺片のみが出土していることから中世段階の遺構である可能性が高く、また規模も長軸・短軸とも他の土坑と較べて大きいことから倉庫的な機能を有していた可能性も考慮できる。

【下野郷館跡第3地点】

第3地点は東日本大震災により被災した個人住宅建築工事に伴い、平成24年に調査が行われている。検出遺構は溝跡2条、土坑4基などであり、出土遺物の年代観から大半が近世以降の遺構であると考えられている。このうち調査区のほぼ中央から東側にかけて東西方向に走方向を有しているSD01は、第1地点B区で確認されたSD212の延長線上に相当することから、近世段階での区画溝である可能性が考慮される。



第4図 下野郷館跡第1～3地点合成図

2. 調査の概要

a. 調査に至る経緯

平成23年9月に下野郷字館内地内において被災家屋の解体及び新築工事についての照会があり、岩沼市教育委員会では対象地が下野郷館跡の範囲に含まれている旨を回答した。その後地権者より平成23年9月6日付けで「個人住宅新築工事計画と埋蔵文化財のかかわりについて」の協議書が提出され、ついで9月15日付けで文化財保護法第93条に基づく発掘届が提出された。その後、岩沼市教育委員会では宮城県教育委員会文化財保護課の指示を受けて被災家屋の撤去時に工事立会を実施し、撤去完了後の10月19日に遺構・遺物の有無等を把握すること目的とした確認調査を実施したが、重機を使用した掘削時より近世遺物が出土し、また現地表下70cmほどで遺構の存在が確認できることから記録保存を目的とした本調査へと切り替えた。なお、対象地には庭木や納屋が隣接して存在しており、掘削により発生する残土を置けるスペースが限られていることから調査面積を縮小して調査を実施している。

b. 調査経過と方法

平成23年10月19日から重機を使用した表土掘削を開始した。設定した調査区の面積は21m²である。その後、人力によって遺構精査作業を開始し、遺構確認状況の全景撮影を10月19日に行ったのち、遺構の掘り下げ、土層図及び平面図の作成を随時実施し、10月26日に完掘状況の全景撮影を行った。その後も随時遺構写真撮影、遺構図面の作成作業を経て、10月28日に調査及び機材搬出を終了した。

国家座標及び海拔の移動は本格調査へ切り替えた後の10月20日に行った。本調査で使用した測量軸の設定に関しては、国家座標を使用した。使用した測量原点は岩沼市公共基準点3-019(X ; -208945.178・Y ; 6654.229)と同2-011である。そして調査敷地内のX ; -208702.000・Y ; 6148.000の地点にXOYO杭を設定し、2mごとにグリッドライン名を附した。また各グリッドの名称は北東隅の交点を採用した。

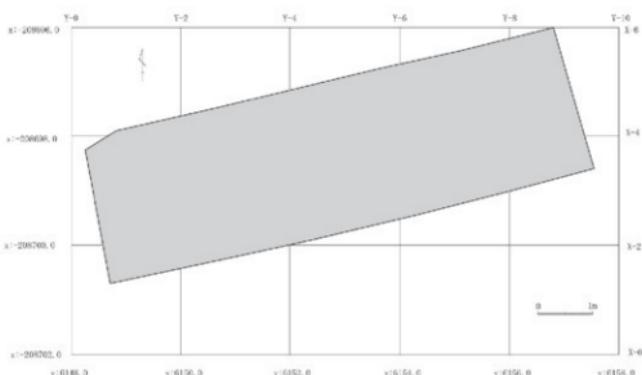
出土品の整理作業・報告書の作成は、暫時の中断を挟みながら2012年12月1日から2013年2月28日にかけて、岩沼市文化財整理室内で行なった。

c. 基本土層

本地点では近現代において宅地化されたことから上層では盛土等が行われているが、その直下では近世の旧表土が残るなど土層の遺存状況は概ね良好である。また旧地形は、確認面での観察では南北方向は調査範囲が狭いために一概には言えないものの概ね水平であったのに対し、東西方向は東から西にかけて若干傾斜している。なお、遺構精査は、旧表土下の褐色粘質シルト上面で行っている。



第5図 調査地点位置図と調査区配置図



第6図 グリッド配置図

3. 発見された遺構と遺物

本調査で発見された遺構の内訳は、井戸跡2基、溝跡2条、土坑9基、焼土・炭化物を上面に有する性格不明土坑4基、ピット15口である。遺構の分布は調査区が狭小のためほぼ全域で見られるが、本調査で特徴的な検出遺構であるSX01～04は中央部より西側に集中している傾向がある。

以下、特徴的な検出遺構、及び遺物が出土した遺構について記述する。遺構の方位は長軸方向を主軸方位とし、北からの振れをN-○°-WまたはN-○°-Eに統一して表記する。

なお、個々の遺構の年代観については、遺構出土の遺物が僅少であることからここでは明示できないが、現時点では出土遺物の状況、柱穴や柱痕跡の規模、そして第1次調査での知見を加味して概ね近世段階の遺構として認識している。

a.井戸跡

SE01井戸跡

調査区北側東部に位置する。他の遺構との重複関係は無い。平面形状は梢円形を呈し、規模は長軸128cm、短軸112cm、確認面よりの深さは59cmを測る。断面形状は円筒状であり、主軸方位はN-61°-Wを測る。堆積土は6層に分層でき、すべて人為的埋土である。なお、最下層の6層では層中に厚さ5mmほどの炭化物層を帶状に堆積していた。

遺物は生産地不明の白磁輪花鉢、在地産施釉陶器擂鉢、近世平瓦、土製品土人形が各1点出土しているが、いずれも細片のため図示不可能である。

SE02井戸跡

調査区東壁際に位置する。SD01と重複し、これより新しい。壁際での検出のため確認面からは僅か9cm程度の掘下げを行ったのみであり、規模等については不明な点が多い。

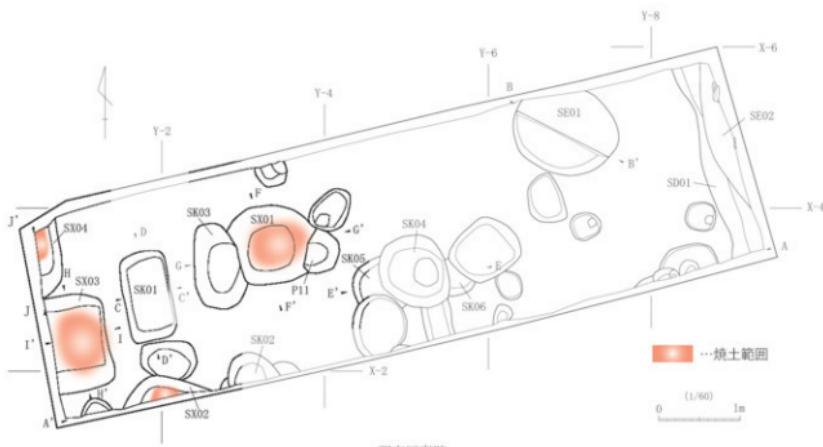
遺物は上面からの出土のみであるが、第9図1、2に図示した大堀相馬焼小杯2点のほか、大堀相馬焼碗4点、徳利2点、瀬戸美濃産陶器碗1点、皿1点が出土している。

b.溝跡

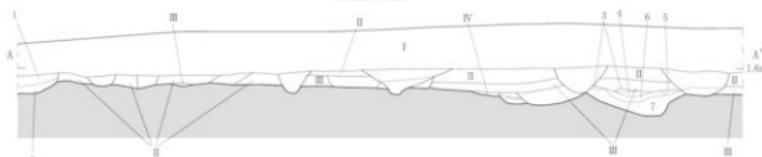
SD01溝跡

調査区東部に位置する。SE02と重複し、これより古い。壁際での検出であり、東側立ち上がりは調査区外へ展開するため規模等については不明な点が多いが、確認面からの深さは13～21cmであり、南から北側へかけて傾斜している。主軸方位はN-19°-Wを測る。堆積土は2層に分層でき、すべて人為的埋土である。

遺物は第9図6の在地産施釉陶器壺1点、7の金属製品刀子1点、8の石製品砥石1点が出土したほか、大堀相馬焼碗1点、皿2点、近世平瓦1点が出土している。

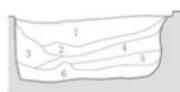


調査区南壁



基本土層 土層注記

編No.	土色	土質	備考
I	黄土		既存住宅等の盛土。
II	にじい・黄褐色	シルト	灰黃褐色粘土微含む。
III	暗褐色	(10YR3/2)	軽質シルト。暗黒化した灰黃褐色粘土を含む。
IV	褐色	(10YR4/0)	軽質シルト。大小鉄質のある粘土。基層下で部分的に礫层。

SE01
B B' - 1.6m

SE01 土層注記

編No.	土色	土質	備考
1	褐色	(7.3194/3)	シルト。暗褐色粘土ブロック少量含む。
2	褐色	(7.3194/4)	シルト。暗褐色粘土ブロック少量含む。
3	暗褐色	(7.3194/2)	軽質シルト。暗褐色粘土ブロック少含む。
4	褐色	(7.3194/2)	軽質シルト。暗褐色粘土ブロック少含む。
5	褐色	(7.3194/3)	軽質シルト。暗褐色粘土ブロック少含む。
6	褐色	(7.3194/4)	軽質シルト。中に厚さ1ミリの炭化物を複数に確認。

SK01
C C' - 1.4m B' - 1.4m
2 1 2 5 2 1 3 2 5

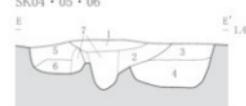
SK01 土層注記

編No.	土色	土質	備考
1	褐色	(7.3194/3)	軽質シルト。しまりやけい、炭化物少量含む。
2	褐色	(7.3194/3)	軽質シルト。しまりやけい、炭化物少量含む。
3	褐色	(7.3194/3)	軽質シルト。しまりやけい、炭化物微量含む。
4	灰褐色	(7.3194/2)	軽質シルト。しまりやけい。

南壁上層注記

編No.	土色	土質	備考
1	灰黃褐色	(10YR8/2)	炭化物少量含む。SE01覆土。
2	暗褐色	(10YR3/2)	炭化物微量含む。SE01覆土。
3	墨褐色		炭化物層。SE01覆土。
4	赤褐色		地層上、極めて硬分化する。SE02覆土。
5	赤褐色	(10Y4/0)	粘質シルト。地層上と深層、炭化物をやや多く含む。SE02覆土。
6	灰黃褐色	(10YR8/2)	粘質シルト。黄色化粘土ブロック、炭化物を少量含む。SE02覆土。
7	こじい・黃褐色	(10YR4/3)	粘質シルト。炭化物少量含む。SE02覆土。

SK04・05・06 土層注記



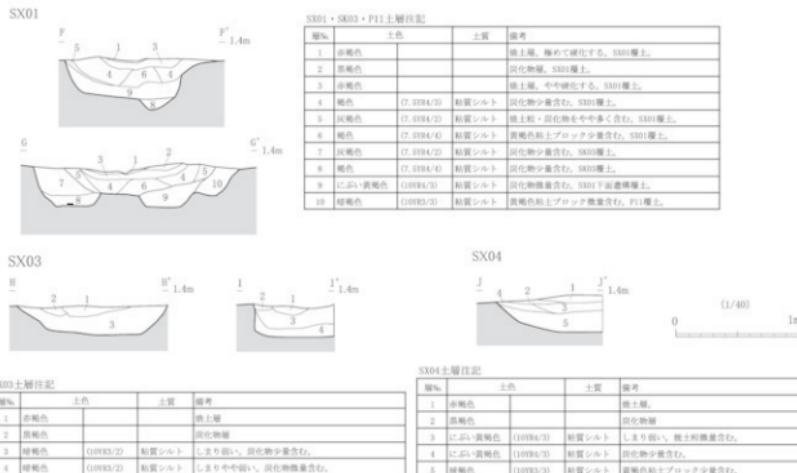
SK04・05・06 土層注記

編No.	土色	土質	備考
1	褐色	(10YR4/0)	粘質シルト。炭化物微量含む。SK04覆土。
2	暗褐色	(10YR3/2)	粘質シルト。炭化物をやや多く含む。SK04覆土。
3	にじい・黃褐色	(10YR8/3)	粘質シルト。炭化物少量含む。SK05覆土。
4	こじい・黃褐色	(10YR4/3)	粘質シルト。褐色粘土層含む。SK05覆土。
5	こじい・黃褐色	(10YR8/3)	粘質シルト。褐色粘土少量含む。SK05覆土。
6	灰褐色	(10YR8/2)	粘質シルト。炭化物少量含む。SK06覆土。
7	灰褐色	(10YR4/2)	粘質シルト。炭化物少量含む。竹瓶跡。

(1/40)

0 1m

第7図 遺構全体図、土層断面図(1)



第8図 土層断面図（2）

c.土坑

SK01土坑

調査区西側に位置する。他の遺構との重複関係は無い。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸110cm、短軸58cm、確認面からの深さは12cmである。断面形状は長軸方向が皿形、短軸方向では箱形であり、主軸方位はN-10°-Wを測る。堆積土は5層に分層でき、全て人為的埋土である。なお、土坑の中央では幅18cmほどの円形の褐色粘土が見られる。

遺物は、第9図3の在地産施釉陶器鉢1点、4の金属製品煙管雁首1点が出土したほか、大堀相馬焼碗1点、小野相馬焼碗1点が出土している。

SK02土坑

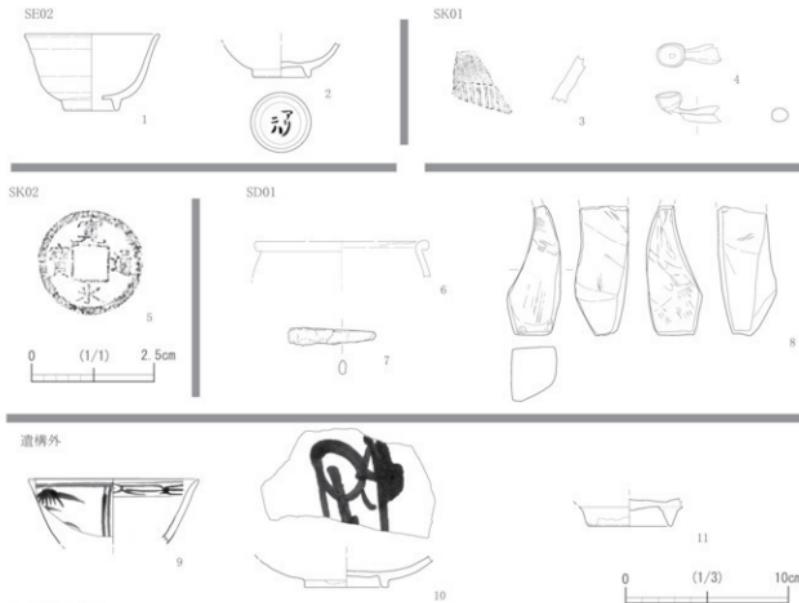
調査区南部に位置する。P13と重複関係にあり、これより新しい。調査区外へさらに展開するため形状・規模については不明な点が多いが、確認面よりの深さは15cmである。断面形状は皿形を呈する。堆積土は1層であり、人為的埋土である。

遺物は、第9図5の寛永通寶（新寛永）が1点出土している。

SK03土坑

調査区中央部西側に位置する。SX01と重複関係にあり、これより古い。東側の一部をSX01によって失われているが、平面形状は梢円形を呈するものと思われ、規模は長軸108cm、確認面からの深さは30cmである。断面形状は台形状を呈し、主軸方位はN-12°-Wを測る。堆積土は2層であり、いずれも人為的埋土である。

遺物は、大堀相馬焼碗1点が出土しているが、細片のため図示不可能である。



No.	出土位置	種別	器種	口径・高 (cm)	底径・幅 (cm)	脚高・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	SE02	施釉陶器	小坪	8.4	3.4	4.7	内外面灰釉 高台削出 大堀相馬・19世紀前葉～中葉	6-5	JII-7
2	SE02	施釉陶器	小坪	—	3.6	—	内外面灰釉 高台に墨書き 大堀相馬・19世紀前葉～中葉	6-7	JII-8
3	SK01	施釉陶器	手す鉢	—	—	—	内外面灰釉 在地産 19世紀代	6-8	JII-2
4	SK01	金風製品	細管・瓶首	(4.1)	1.5	0.9	重量5.16g 19世紀代	6-9	JII-3
5	SK02	金風製品	鉢質	外径 2.26	内径 1.79	0.11	新見水 重量1.26g	6-3	JII-1
6	SD01	施釉陶器	盤	10.8	—	—	内面鉄輪・外面灰釉 在地産？	6-1	JII-4
7	SD01	金風製品	刀子・柄	(5.3)	1.2	0.5	重量4.19g	6-4	JII-6
8	SD01	石製品	砥石	(7.9)	3.2	3.3	重量108.5g 仕上砥 全面を使用	6-10	JII-5
9	顕微時	磁器	染付・模擬板	10.5	—	—	内面竹文 内面西方博文 瓢箪美濃産 19世紀中葉以降	6-6	JII-9
10	顕微時	施釉陶器	盤	—	5.2	—	内面に鉄輪 内外面灰釉 高台削出 大堀相馬・19世紀前葉～中葉	—	JII-10
11	顕微時	施釉陶器	碗	—	5.2	—	内外面灰釉 粘付高台 小野相馬・19世紀代？	6-2	JII-11

第9図 出土遺物

SK04土坑

調査区中央部に位置する。SK05・06と重複関係にあり、両者より新しい。本遺構は柱痕跡をとどめていることから本来は建物等を構成する柱穴と考えられる。平面形状は不正円形を呈し、規模は長軸91cm、短軸83cm、確認面からの深さは25cmである。断面形状は浅い皿型を呈するが、柱当りの部分には10cmほど沈降している。主軸方位はN-19°-Wを測る。堆積土は3層に分層でき、全て人為的埋土である。なお、第1層は柱切り取り時によるものと思われる。

遺物は、大堀相馬焼碗1点が出土しているが、細片のため図示不可能である。

SK05土坑

調査区部中央部に位置する。SK04・07と重複関係にあり、両者より古い。南側をSK07、東側をSK04によって大きく失っているため平面形状・規模は不明な点が多いが、確認面からの深さは37cmである。断面形状は箱形を呈し、主軸方位はN-61°-Eを測る。堆積土は2層に分層でき、いずれも人為的埋土である。

遺物は、大堀相馬焼碗1点が出土しているが、細片のため図示不可能である。

d. 不明土坑

SX01不明土坑

調査区中央部西側に位置する。SK03、P11と重複関係にあり、両者より新しい。西側をSK03、東側の一部をP11によって大きく失っているため平面形状・規模は不明な点があるが、短幅96cm、確認面からの深さは35cmである。断面形状は皿形を呈する。堆積土は6層に分層でき、3～6層は人為的埋土であり、1層は焼土、2層は炭化物、3層は焼土塊と炭化物の混合層となっている。なお1層は被熱により硬く焼け締まっていた。

遺物は、肥前産磁器染付皿が1点、大堀相馬焼碗2点が出土しているが、いずれも細片のため図示不可能である。

SX02不明土坑

調査区西側南壁際に位置する。P15と重複関係にあり、これより古い。調査区外へさらに展開するため平面形状・規模は不明な点が多いが、確認面よりの深さは25cmである。堆積土は5層に分層でき、SX01同様に下位（6・7層）は人為的埋土であり、上層（3～5層）はそれぞれ炭化物、焼土、焼土塊と炭化物の混合層となっている。なお4層は被熱により硬く焼け締まっていた。

遺物は出土していない。

SX03不明土坑

調査区西側の西壁際に位置する。調査区外へさらに展開するため規模は不明な点が多いが、平面形状は方形もしくは長方形を呈するものと思われる。また南北方向での1辺は121cm、確認面よりの深さは25cmである。断面形状は南北方向が皿形、東西方向では箱形を呈するものと思われ、主軸方位はN-11°-Wを測る。堆積土は4層に分層でき、3・4層は人為的埋土であり、1層は焼土、2層は炭化物層となっている。なお1層は被熱により硬く焼け締まっていた。

遺物は出土していない。

SX04不明土坑

調査区北西壁際に位置する。調査区外へさらに展開するため平面形状・規模は不明な点が多いが、確認面よりの深さは30cmである。堆積土は5層に分層でき、3～5層は人為的埋土であり、

1層は焼土、2層は炭化物層となっている。なお1層は被熱により硬く焼け締まっていた。
遺物は、在地産と考えられる施釉陶器壺が1点出土しているが、細片のため図示不可能である。

e. 遺構・外出土遺物

今回の調査では、第9図9～11に図示したものを含め、表土掘削時に磁器が染付皿6点、染付碗3点、染付小壺4点、施釉陶器が皿1点、碗13点、小壺2点、すり鉢1点、土器が皿1点、瓦質土器が五徳1点、石製品が砾石1点出土しているが、大半が細片であった。

4.まとめ

- ・下野郷館跡は、岩沼市下野郷字館内に所在し、地質学的には五間堀川左岸の自然堤防上に立地している。
- ・周辺では平成12～15年にかけて県道改良工事に伴う発掘調査が実施され、中世～近世までの遺構・遺物が確認されている（第1地点）。
- ・今回の調査区は第1地点から約50m東に位置し、近世を中心とした遺構・遺物は確認されているが、中世に遡るものは確認されなかった。
- ・柱痕跡を有する柱穴も調査区内には存在しているが、調査面積が限られており全体復元は不可能である。
- ・調査区西側では、上面に被熱し硬化した焼土層を有する不明土坑が4基確認できた。これらの覆土中からは近世陶磁器小片が出土していることから、近世の所産であると考えられる。
- ・不明土坑の堆積土中には、粒状滓をはじめとする金属質の遺物は一切出土していないことから、鍛冶関連遺構の可能性は現時点では低いものと考えられる。
- ・不明土坑はいずれも25～35cmほどの掘り込みを有することが共通している。なお、同様の遺構は第1地点の調査では未検出であり、これらの性格については遺跡地内の分布も含め、今後の検討課題である。

引用・参考文献

- 岩沼市 1984 『岩沼市史』 岩沼市史編纂委員会
- 岩沼市 1992 『岩沼市土地分類調査（細部調査）報告書・現況調査編』
- 岩沼市教育委員会 2000 『引込横穴墓群発掘調査報告書』 岩沼市文化財調査報告書第1集
- 岩沼市教育委員会 2004 『下野郷館跡』 岩沼市文化財調査報告書第2集
- 岩沼市教育委員会 2004a 『鶴ヶ崎城跡・第2地点』 岩沼市文化財調査報告書第3集
- 岩沼市教育委員会 2004b 『鶴ヶ崎城跡・第3地点』 岩沼市文化財調査報告書第4集
- 岩沼市教育委員会 2005a 『長徳寺前遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第5集

- 岩沼市教育委員会 2005b 『鶴ヶ崎城跡・第4地点』 岩沼市文化財調査報告書第6集
- 岩沼市教育委員会 2007 『朝日古墳群』 岩沼市文化財調査報告書第7集
- 岩沼市教育委員会 2009 『竹駒神社境内遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第8集
- 岩沼市教育委員会 2010 『丸山遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第9集
- 岩沼市教育委員会 2011 『西須賀原遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第10集
- 岩沼市教育委員会 2012 『上根崎遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第11集
- 小野力・志間泰治 1968 「裝飾土器を出土した宮城県岩沼町所在の長谷寺横穴古墳調査報告」『日本考古学協会第34回総会研究発表要旨』
- 鍛治一郎・佐藤宏一他 1962 「宮城県岩沼町丸山横穴古墳群」『東北考古学 第3号』
- 多賀城跡調査研究所 1985 「第47次調査」『多賀城跡』 宮城県多賀城跡調査研究所年報1984
- 東北福祉大学吉井ゼミナール 2011 「鶴ヶ崎城跡（岩沼要害）・第10次発掘調査報告書」 東北福祉大学
- 宮城県教育委員会 1993 『北原遺跡』 宮城県文化財調査報告書第159集

写 真 図 面



1. 挖削風景（東から）



2. 調査風景（西から）



3. 造構確認状況（北東から）



4. 造構確認状況（南西から）

写真図版 1



1. SX01確認状況（南西から）



2. SX01被熱箇所近景（南東から）



3. SX01南東部分土層断面（南東から）



4. SX01北西部部分土層断面（北西から）



5. SX01・SK03・P11完掘状況（南から）

写真図版2



1. SX02完掘状況（北から）



2. SX03南東部分土層断面（南東から）



3. SX03完掘状況（北から）



4. SX04完掘状況（東から）



5. SE01土層断面（西から）

写真図版 3



1. SD01・SE02完掘状況（南から）



2. SK01北東部分土層断面（北東から）



3. SK01完掘状況（北から）



4. SK04・05・06土層断面（北から）



5. 西側遺構群完掘状況（北から）



1. 完掘状況全景（東から）



2. 完掘状況全景（北西から）

写真図版 5



写真図版 6

報告書抄録

岩沼市文化財調査報告書第12集
東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

—下野郷館跡第2地点—

平成25年3月

発行 岩沼市教育委員会

岩沼市桜1丁目6番20号

生涯学習課 TEL0223(23)1111 内線573

印刷 株式会社 国井印刷

岩沼市藤浪1丁目4-35

TEL0223(22)2221